

「こころときめく贈り物」

～高校生にすすめる1冊の本～

初月号～続編～



愛知県教育委員会

高校生のみなさんへ

平成26年はどんな年でしたか。
新たな出会いや経験はあったでしょうか。

さて、このリーフレットの初月号では、県内の先生方からの推薦ベスト8の本にメッセージを添えて紹介しました。今回は、初月号で紹介した本について、これらの本をおすすめする先生方からのメッセージのすべてを掲載し、おすすめ本のさらなる魅力を紹介します。

それぞれの本について、複数の先生方が様々な視点からメッセージを贈っていただきました。同じ本でも読む人や読む時期によって感じ方や受け止め方が異なっていることがあり、みなさんは「いろいろな感じ方があるのだなあ」と興味深く思うのではないのでしょうか。

新しい年の始まりを機に、今回のおすすめ本の中から1冊読んでみてはいかがでしょうか。みなさんが本を読んだ後に、「この本に出会えてよかった」と思えるかもしれません。今まで知らなかった新しい世界が広がることがありますよ。



笑って、泣いて、山の生活に魅了されます！



○ 神去なあなあ日常

三浦 しをん／著

徳間書店

2012.9



みなさんは、高校卒業後の進路を明確に決めていますか？

この本の主人公の勇氣は、進路決定ができないまま、高校を卒業しようとした都会の男の子です。高校の卒業式終了後、担任の先生から「お前の就職先を決めてきてやったぞ」と、いきなり三重県のド田舎「神去村」への片道切符を渡され、わけのわからないまま林業に勤しむことになります。のんびりとした村の雰囲気と「なあなあ」な住民に囲まれ、成長していく主人公がだんだんたくましく見えてくる温かい作品です。豊かな自然描写も読みごたえあり！！



高校を卒業して、特に目標もなくプラプラしようと思っていた主人公は、進路の先生と両親にはめられて林業見習いをするに。その地・神去村は携帯電話も通じない、コンビニもないような超・山奥の辺境。しかも村人は静かで破壊的！ そんな環境で自分の無力さにへこんだり、立ち直ったりしながらほんのちょっとずつ成長していく主人公を、村のみんなは木を育てるように厳しく、かつ優しく見守ります。すぐに結果を求めないことの大事さを読後感じられる、イマドキヘタレ少年奮戦記。



ふだんあまり読書をしないという人にもとても読みやすいおすすめ本です。高校卒業時、進路に迷う都会育ちの主人公が、ふとしたきっかけで山奥の村で林業に携わることになり、だんだん人として成長していく物語です。ユーモラスに描かれていて、読後感もとても良いです。



高校を卒業したら適当にフリーターで食べていこうと思っていた都会の若者が、親と先生の陰謀により、突然三重県の山奥で林業研修をすることになりました。主人公の日記風に書かれたこの物語は、神去村での1年間の体験を綴ったものです。なあなあとは、この村の方言で「ゆっくりのんびりいこう」という意味です。個性的で魅力あふれる村人との交流を通じて、少しずつ変化してゆく都会育ちの主人公。素人のワイルドな林業体験のおかしさと、時々起こる事件のドキドキ感をぜひ味わってほしいと思います。



横浜生まれの平野勇氣が高校を卒業して三重県の神去村で林業の仕事に就きます。あまり馴染みのない林業のたいへんさやおもしろさが生き生きと描かれています。山村での生活や人々との交わりで勇氣が味わう戸惑いと驚きは、そのまま私たち読者の新鮮な感動となります。神去村の日常に通底している山の神への畏敬や巧みへの尊敬が、「自然との共生とは何か」というテーマを、勇氣の具体的な体験をとおして、より深く掘り下げて考えさせてくれます。魅力ある登場人物への興味が続編『神去なあなあ夜話』への呼び水にもなっています。



主人公は18歳、高校卒業後に半ば強制的に三重県の神去村に林業研修に出された青年。そこは携帯電話も圏外になってしまうほどの山奥の村。村人たちの口癖も、「あわてずゆっくり行こう」というニュアンスの「なあなあ」という言葉。そんな環境の中で主人公は植林作業を通じて自然の不思議さを体感し、村人たちの考え方や生き方に反発しながらも、次第に共感していきます。強烈な個性の天才植林作業員も登場し、ハラハラと、ほどよいおかしさが入り混じり、日常の時間に追われている人に「なあなあ」の大切さを感じさせてくれる1冊です。

一読あれ、時に抱腹絶倒、時に切ない、 青春ファンタジー



○ 風が強く吹いている

三浦 しをん／著
新潮社
2009.7



あなたは、「あの時、もっとああしていれば」と後悔をしたことがありますか？

私はこの本を読むうちに、自分の学生時代を後悔しました。話にのめり込むほどに、誰かに巻き込まれてでも、流れに乗ってでも、何かに一生懸命になっておけばよかったという思いが強くなりました。「風が強く吹いている」は、挫折を経験した主人公が先輩に巻き込まれて箱根駅伝出場を目指す物語です。あなたも巻き込まれたつもりで表紙を開いてみてください。この本を読み終わる頃には、きっと新しいことに挑戦したくなっているはずです。



舞台は今や冬の風物詩ともなった箱根駅伝。寛政大学（現実には存在しない）に、入学してきた1年のスーパーヒーロー蔵原走（かける）を中心に物語が展開します。駅伝部員全員が寮生活を通じ、強烈な個性が融合してチームワークとなっていく流れは、どんどんページを進ませてください。合宿の様子、記録会を経て本大会へと進み、部員ぎりぎり10人で箱根駅伝大会への出場を果たします。そして、クライマックスは、10区間での他校との順位争い、寛政大学のメンバー個人個人の思いなどが克明につづられます。そして、結果は……。ぜひ、読んでみてください。陸上部以外の人でも楽しめます。ちなみに、映画化もされました。4年生でキャプテンの清瀬灰二役は小出恵介でした。原作にかなり忠実に描かれています。



最少人数で競技の頂点をめざす、本書はスポーツ青春ものの王道とも言える設定です。舞台は箱根駅伝。主人公の天才ランナー「走（かける）」は、過去に暴力事件を起こしています。陸上競技しか知らなかった「走」が、大学生活の中で、陸上部の仲間やライバル校の先輩達と知り合って成長していく姿にひきつけられます。

「思いを言葉にかえる力、自分のなかの迷いや怒りや恐れを冷静に分析する目。」

「速いランナー」ではなく「強いランナー」になるために、彼はそれを得たいと願って努力します。読後には、寛政大学チームの「風」を感じます。



清瀬は、走の走る姿に魅了され、大学で野宿していた走を自分の下宿に引き込みました。これで、竹青荘の全室が埋まり、清瀬と大家さんの宿願に一步近づきます。天才ランナー走を迎え、状況は一変。実は大家さんは日本陸上界の至宝と言われた人物で、竹青荘は某大学陸上競技部錬成所でした。10人そろった今、皆で箱根駅伝を目指すのです。半年後の予選会を素人ばかりの集団で目指します。個性豊かなメンバーが織りなす、スポ根あり、ロマンスありの青春小説。

「わかればいい」と清瀬は言った。「きみは一人じゃないってことがな」

読後にはきっと、あなたも走りたくなります。

小さな努力の積み重ねが大きなことを成し遂げる。言葉の海へ旅立とう！



○ 舟を編む

三浦 しをん／著
光文社
2011.9

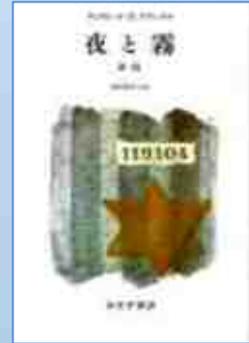
辞書を作るために奮闘する主人公とその仲間のお話です。出版社に勤める主人公の辞書に対する熱き思いからは、自分の仕事に情熱を傾ける人の素晴らしさが伝わってきます。あなたは、主人公を通じて、物事に熱心に取り組む人の美しさと日本語の奥深さを感じることでしょ。あなたには熱き思いを寄せる何かはありますか？ 数千ページの辞書も、作るときは1ページからの歩み。小さな努力の積み重ねが大きなことを成し遂げる大切さを教えてくれます。また、一人ではできない大きな物事でも、みんなの力を集めて取り組めば達成できるというメッセージも込められています。

なじみの深い辞書、その編纂に携わる人々の努力を淡々と、かつロマンティックに描いています。硬い世界を素材としているにもかかわらず、詩的な表現により、言葉の織りなす世界が大きな夢を内包していることに気づかされます。様々な人間の思いや主人公の恋愛なども絡ませて、一気に読み終えてしまうことでしょ。表装や紙質にまでこだわ、辞書編纂の陰の仕事を知ることにより、普段、何気なく使っている言葉に対する興味をそそられることはもちろん、読み物としての「辞書」への愛着が湧いてくると思います。

最近では言葉を調べるのも電子辞書、携帯電話やスマートフォンの辞書機能を使うことが多くなっていますね。そもそも「意味調べなんて面倒くさい」と、授業で課題にでもしないと辞書を使うことも少なくなってきたような気がします。この本は新しい国語辞典を編集するために多くの時間を費やし苦労を重ねる人たちの恋あり、笑いあり、涙あり、そしておいしい食ありのお話です。この本を読めば、辞書それも紙の辞書にさわりたいくなる(?)、引きたくなることまちがいなし!!

辞書を使って言葉の意味を調べることが好きですか？ 私は時々、辞書で読書します。五十音順に行儀よく並べられた言葉たち、一つ一つの意味を読んでも、意外に引き込まれるものです。「今時は電子辞書でしょ・・・」というあなた、何種類もの辞書をすべてカバーしている電子辞書は確かに万能で、予習復習も効率的にこなせますね。この本を読むと、1冊の紙辞書ができるまでの出版の現場がわかります。紙辞書編纂の現場で、全く効率的とはいえない地味な仕事をこつこつと積み重ねる主人公がいます。馬締(まじめ)という名のこの人は、辞書編纂という天職と彼をよく理解する仲間にもまれて、13年という長い歳月を費やし、辞書を完成させるのです。彼と仲間達の仕事ぶりに触れると、紙辞書への思いが深まりますよ。また、あなたの進路についてもヒントがもらえるかもしれません。

「生きることの意味は？」と悩む君に贈ります！



○ 夜と霧 新版

ヴィクトール・E・フランクル / 著

池田 香代子 / 訳

みすず書房

2002.11



強制収容所から奇跡的な生還を果たした精神科医の記録。現代の社会ではまずあり得ない記録となっています。過酷な環境の中では、心の支え、つまり生きる目的を持つことが生き残る唯一の道であると説いています。また、収容所の中でどれほど人間が醜くなるのか、どれほど美しくなれるのか。この本を読み自問自答をしますが、美しく振る舞い、生き残ることに、全くと言っていいほど自信がありません。ただ、私はこの本を読んでからしばしば夕焼けを見て立ちすくむことがあります。迷わず高校生にすすめる1冊です。写真の付いている旧版もおすすめです。



人生に絶望し、生きることの意味を見失いそうな時、あるかもしれませんね。この本はナチスの強制収容所から生還したユダヤ人精神科医である著者が、収容所内の人々の心理や行動を考察し、「生きる」ことの本質を語りかけてくれる名作です。「生きることから何かを期待するのではなく、むしろひたすら、生きることが私たちから何を期待しているかが問題だ」という考えにコペルニクス的転回を感じます。すべての尊厳を奪われた過酷な状況においても、心の世界、愛する人を思う心、未来への希望を失わない人々の姿が、生きる勇気を与えてくれます。



本の中に、こんなことが書いてあります。「わたしたちはためらわず言うことができる。いい人は帰ってこなかった」と。これはどういうことでしょうか。著者フランクルさんは、強制収容所アウシュビッツから生還した人です。いつ自分の死がやってくるかという不安との戦いの日々を過ごし、混乱と飢餓に耐えたのです。でも最愛の妻とは永遠に再会することはできませんでした。収容所で何が行われたのか。戦争の事実の一つを知ってほしいと思います。「いい人」とはということなのかを考える一助にしていただけたらと思います。



いろいろな意味でこの本は特別なんですよね。作者は心理学者、精神科医で、アウシュビッツ収容所の体験、いわゆる限界状況の中での人間の心理が見事に分析されています。読後、苦しい事があっても、この本を思い出して、それに比べればなんと些末なものだと自分に言い聞かせ、乗り切れてしまう不思議な力を持った本です。生きるとは何か、はたまた良心とは何かといった人間の本質的なテーマにも問いかけてくる、まさに一生に一度出会えるかどうかの衝撃的でいつまでも余韻にひたることのできる本です。

**みんなといても寂しいあなた！
一人ぼっちは寂しくないよ！**



○ きみの友だち

重松 清／著

新潮社

2008.7



友だちとの関係が上手くいかなくて、悩んでいませんか。友だちの言動で傷ついたり、逆に傷つけたりした経験のある人もたくさんいることでしょう。クラスメートと一緒にいて足が不自由になった恵美ちゃんと、病弱な由香ちゃんは教室で孤立しています。ブンちゃんとモトくんとの関係も微妙、そのほか何人かの子どもたちが、相手の気持ちが理解できずに苦しんでいます。この本は、そんな子どもたちが成長していく過程を連作形式で描いています。最終章では、成長した子どもたちが過去を振り返り、心を通わせる場面が涙を誘います。友だちって、どういう存在なのかがわかる貴重な1冊です。



タイトルからもわかるように、“友だち”がテーマになっている連作長編。恵美ちゃんという女の子と、その周辺の人々が各話で主人公になり、それぞれのエピソードをとおして、“友だち”って何なのかを考えさせます。この本を読み終えてまず感じたのは、「ああ、高校生の時にこの本を読んでいたら」でした。26歳の私がこの本と出会っても、今まで作り上げてきた“友だち”との関係を変えるのは難しい。でも高校生のあなたたちは、まさに今“ほんとうの友だち”に出会うチャンス。高校生の今だからこそ読んでほしい1冊です。



ずっと一緒にいるのが「友だち」？ 一人ぼっちでいたくないから、いつも「みんな」の目を気にする？ 松葉杖を使う恵美と小さい頃から病気の由香は、急いでも「みんな」に追い抜かれてしまう。だから、二人でゆっくり歩く。でも、一緒にいなくても寂しくない「友だち」なんだって。それは、互いを「もこもこ雲」だと思っているからだよ。「みんな」からはじかれたり、こぼれ落ちたりしたことある？ 何をやっても思い通りにいかないことある？ たくさんうつむいてから顔を上げると、笑顔になるらしいよ。まあいいか、ゆっくり歩こう。そんな風に思えたらいいね。



高校生のきみにとって、友だちってどういう存在なのでしょう。毎日メールをするのが友だち？ 何でも話せて、わかり合えるのが友だち？ 友だちと聞いて、誰の顔を思い浮かべた？ その友だちは、きみのことを思い浮かべてくれかたな。友だちって、難しいでしょう。急に傷つけられることもあるし、知らないうちに傷つけてしまうこともある。どうしたら上手くいくのか、きみは悩んでいるかもしれませんね。この本には、同じように悩んでいる「友だち」が登場します。その「友だち」は、きみにそっと寄り添って励ましてくれるはずですよ。

今を生きる君たちに勇気を与えてくれる
必読の書。竜馬は君たちの心にある。



○ 竜馬がゆく

司馬 遼太郎／著
文春文庫
1998.9



主人公は、土佐藩の下級武士であるご存じ坂本龍馬。1853年のペリー来航をきっかけに、無名の下級武士が、当時としては犯罪行為にあたる脱藩をします。そして、新しい日本を模索しながら奔走する姿は、今を生きる自分とこれからの自分のあり方を考えるきっかけをつくってくれます。どれほどの多くの若者が1963年の初版以来この本と出会い、そして勇気をもらって社会へ飛び立っていったことでしょう。かくいう私もその一人です。龍馬が混沌とした幕末の時代をいかに生きたかを知ることは幕末の時代背景を理解する機会にもなります。長編ですが、すべてを読み終えたときあなたの心にはきっと火がつかます。高校生のうちにぜひ読んでほしい1冊です。



はじめて読んだのは大学生の時でしたが、8冊の文庫本を一気に読み終えた後、「高校生の時に読んでおけばよかった」と思ったものでした。それほど主人公の坂本龍馬の生き方に惹かれましたし、日本史の副読本として楽しく読むことができました。春休みを利用して高知県の桂浜まで一人で出かけたのも、青春時代の思い出になっています。高校生の皆さんにおすすめする作品です。



高校卒業後の進路について迷っていた時にこの本を読みました。坂本龍馬については教科書的な知識しかありませんでしたが、この本によって彼がどうして歴史に名を刻んだか理解できました。同時に、今の自分はどうかという比較もできました。歴史上の人物と比較することは無理がありますが、この小説はそれを許してくれました。勇気を与えてくれました。叱咤激励してくれている気がしました。読書後、迷うことなく、進路を決めることができました。



ピンチの後に、チャンスがある。迷いがある人、手にしてみよう。



○ ルーズヴェルト・ゲーム

池井戸 潤／著
講談社
2014.3



野球好きなルーズヴェルト大統領が一番面白いと言った8対7のゲーム。これを題名に掲げ、一企業の復活と再生をかけて登場人物たちが大逆転劇を展開します。

人生は思い通りにはいかないことの方が多いですよ。挫折を経験しながらも、励まされ、自らを鼓舞して諦めずにピンチに立ち向かう。それぞれの人生の中で、一人一人がプライドを保ち、あきらめずに立ち向かうのです。これから社会へと出ていく高校生みなさんにぜひその姿を見てほしいのです。



高視聴率であったテレビドラマの原作です。景気悪化で業績が落ち込んだ中堅規模の電子部品メーカーの復活とその企業の野球部の廃部の危機を打開する奮闘を絡み合わせながら、ストーリーは進行していきます。野球に興味がある人もそうでない人も読んでいくうちに、話の内容に引き込まれていきます。逆境に陥っている中で、ベストの戦力ではなくても、みんなで120%の力を出して、解決していくところに魅力を感じます。

この作品を読み始めると、話の先が知りたくなり、完読します。ぜひ、読んでみてください。



流行語大賞で話題になった、TBS系列ドラマ半沢直樹の原作者、池井戸先生の作品です。同名のタイトルで、テレビドラマ化された原作です。町工場で、デジタルカメラに搭載するイメージセンサーの開発を巡って、他社との競合で、幾度と倒産の危機に追い込まれながら、同時に会社が運営する社会人野球部存続を賭けた部員たちの葛藤とが絡み合い、物語は進展していきます。ドラマ撮影時では、地元愛知県豊橋市でロケが行われて、郷土愛も誘われます。ドラマとの違いを探しながら読むのも楽しみの一つです。逆転につぐ、逆転。さて、結末はいかに？



百年前も感動した。百年後もきっと感動する、永遠の名作。



○ こころ

夏目 漱石／著
新潮社
1952.3

自分がひそかに愛する女性を、自分の無二の親友も恋していると知ったら、あなたはどうしますか？ 自分の利益にしがみついた結果、取り返しのつかない過ちを犯してしまったら、あなたはどう償いますか？ 恋愛と友情、裏切りと孤独、生きる苦悩を余すところなく伝える、永遠の名作です。明治時代の青年たちの生き方に、現代の高校生もきっと深く共感するところがあるはず。さあ、あなたも不滅の「漱石」ワールドへ！

文豪夏目漱石の後期3部作最後の作品です。登場人物は少なく、話の展開がはやく、どんどん引き込まれていきます。主人公の「私」は、鎌倉の海水浴で「先生」と出会います。先生は人を近づけず、自ら「私は淋しい人間です」というのですが、私はその先生に心惹かれます。そんな先生には、秘密がありました。毎月友人「K」の墓参りを欠かしませんが、そのことについて多くを語りません。先生の抱える苦しみ、その秘密が、最後に明らかになります。「先生」「私」などの「こころ」を追っていくと、人間のエゴ、孤独、生きることの意味など多くを考えさせられる作品です。

「こころ」が「朝日新聞連載100周年」なのをきっかけに、久々に読んでみました。教科書にも作品の一部がよく掲載されるので、読んだ経験のある人もいることでしょう。しかし、教科書には作品全体が載っていません。「こころ」は、題名のごとく、登場人物の心理描写を實に見事に表現しています。読むたびに、「ああではないか、こうではないか」と推測され、想像が膨らみます。読書をとおして、様々な人物の立場から考えてみることは、自らの人生の糧になります。繰り返し読むほどに味わい深い作品です。高校生のうちに、ぜひ読んでみましょう！

「こころときめく贈り物」～高校生にすすめる1冊の本～は、「愛知県子どもの読書活動」ウェブページで見ることができます。

→ <http://www.pref.aichi.jp/0000027044.html>

発行：平成26年12月（初回号～続編～）

問い合わせ先：愛知県教育委員会生涯学習課

syogaigakushu@pref.aichi.lg.jp

〒460-8534 名古屋市中区三の丸三丁目1番2号

☎052-954-6781 FAX052-954-6962

